

## 蜂刺症の疫学調査とベタメタゾン局所注射の効果についてサマリー

遠藤 健史

**【目的】** 蜂刺症に対し、当院では経験的にベタメタゾン 2mg の局所注射を刺し口周囲に行っている。その効果の検証と蜂刺症全体の経過について明らかにする。

**【方法】** 西ノ島は人口 3,150 人の島で、医療施設は島前病院と浦郷診療所の 2 施設である。浦郷診療所は島前病院の医師が診療を行うブロック制を敷いている。この 2 つの医療機関を受診した 2013 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までの蜂刺症患者を病名から拾い上げ、すべての患者の臨床経過を分析した。症例は 47 名で、87.2%が蜂刺虫症の好発時期とされる 7-10 月に受診している。61.7%が受傷後 2 時間以内に受診している。島外在住の患者は 3 名のみであった。刺傷部位は上肢が最も多く、次に下肢、後頸部とほぼすべてが露出部であった。1 名だけ背部、もう 1 名だけ大腿部の刺傷患者がいた。

治療は 27.7%の患者にベタメタゾン局所注射を行った。57.4%の患者にステロイド外用処方されており、21.3%の患者にステロイドの全身投与を行った。NSAIDs 内服は 10.3%であった。針除去治療を受けたのは 1 名だった。蜂窩織炎様所見となった 4 名の患者には抗生剤投与を行った。

全身のアレルギー反応を起こしたのは 5 例 (10.6%) であったが、4 例は蕁麻疹のみであり、1 例のみ収縮期血圧 70/mmHg, 気分不良でアドレナリン筋注が行われた。蜂刺症による全身アレルギー反応は同時期に当院で全身蕁麻疹、気分不良などでアナフィラキシーを疑われた 12 名の 42%を占める人数である。

発疹悪化により再受診したのは、2 名で、いずれもステロイド外用治療のみを行っていた。ベタメタゾン局所注射群では 1 名のみ 10 日後に掻痒感持続の訴えがみられた。

**【結論】** 蜂刺症の臨床経過の分析を行った。露出部以外の刺傷は非常に少なく、服などで被覆することで多くが予防できると思われる。ベタメタゾン局所注射により、二次感染などの合併症はみられず、皮疹増悪を予防ができるという印象があるが、症例が少なく明確に示されなかった。2014 年も症例分析を続け、追加検討を行う予定である。